梅花之絵

へ 5
6524

松無古今色

尾陽雲松齋文庫

ヘ5
6524

010126022187

敬倘先遺影像存師

孫宗布細

題詞

筆底煙霞抽秘

思囊中風月拈

幽情　翔孫十七

文壇済松壽
千年逢忽發榮
古香俊海

城居亀洞何野宣しまのさて
なる増田氏松子居士東家より
新しき城磯書ありけりここの
風子方家謹梅花と御友
かねまし　記し交りをもて
されたりとさて居士は無風の
理をこゝに守もの茶洞乃

亦し妙さ心を定め 奈らす
枝ぶり かたち気味あひを
嗣なる石組子の かしこさ
美術万般 學ひ こし本
然をよろこひて 其ところは
祭祀を結ひ一冊に纏つて傳へ
道しるべ 何業のこと 我あり
其品を 檢しるしおく [illegible]

まへ書 植の心構へを人に
授け 物のまとまりかたち都ての
會得なし 給はゞ まことの盆
之鏡と 白さしる
老いのまなび 南 和翁

廿四年秋日

齢七十八

大草 [illegible]

き以う

七くさの名をかそへすとても摘てん若菜
はるなる小ゆき里家日数か風
寒さ小おほ小佇も春けしゆとせ雄
若人皆て萌え小せを摘くとも九ちうみ
春の七草小まをと見え通る路来る
菊代むるなちりくとも摘せ二の年

見渡して花の木のまや　芦
桜咲まことこころやさしの芦
花はみつ日くれはまたこの頃
ゆふぐれとひとつにふるや雨の音
摘みに手に昔の夏をまる清水にて
出でてやまさきにこゑまる海にまとひ

そよぎや秋を寄せてはかり
山かりのみるのまま咲きし山にて秋
あきこるの夜に木の間ぬ乞の秋
みどりの際に光へ比の影にて月
友人にまくる
つれなくて盃ぬらせきよの声
暮日にたまひてうけし　九月七日

夕風の吹とゝろくや松の音　初 甘月

千綱に堤の末て居るふしきかな

こからしやゝのちりくれの道ちくを

まつきまよ紫の残ありなきは霜

水のおもふとる羽おとや芦若て

降井へをれかゝるや枝の雪

皆追悼　お文暁

猶てまふく松風や身にしみし　トヨハシ 蓬宇

東つかしき哥の二ところや筆の花　大坂 南叢

ちるをさそふや猶高し桐一葉　ナコヤ 静叟

此まてしゐるや月はよるにかは　杖田 素山

草むしやむしの鳴声おのつから　上毛 紫古

室路や松風とても安よ秋月　ナコヤ 羽洲

打寄めて淋しく成りぬ草の露　東京 素石

鐘ひゞきて松のちる／＼の里　イツモ　四川

七夕の子咲くうれし煙籠の船　大坂　鷺笠

蓑縫し世や月まちて雪ヶ原　オカサキ　石芝

きぬしの縫ひ業や松が下露　ナコヤ　碓多

忽くり来るころふ秋手向や竹の露　オカノ丁　春友

声よするや里日さしあての茶の花　陵芽

寄るその影もしれけよ種めぐれて　ナコヤ　はし兔

松達居士

咲花ゆかしこれより春の露

繕ふおく手わたる夕　月　不燕

秋の夜水盛梢に騒ぎけて　桃不

明るや宵越あかりつかんきこ　竹友

ほつとまてはつと踊りし定め師　寛不

初めて降しうき瓜　寸　五柳

きのふまで咲たるつまて小六月　雲暁

網の赤つ放つる手傳て　固山

へらしと男ふまけぬ古ぬ先　前岡

居てまうけと雲を消すす　梅旬

栄耀からおほえ射その水者　手杜

京のかくり江戸の古國　文旅

皆るまで星ふるもなおもゝ月　抱月

もうる一枚ぬこした生　半擧

秘ことて掌を握る毎力取　笠家

涯ふ味さくすゝ吐さ誦　甚洲

晩稲まゝの妻りも郷まて　依芽

うたゝ世ふ妻まなたうけく　挑石

能荼のゝ流まそゝ花わらて　不慈

まきりと仰の岳てかゝくく　竜石

てる解の唐暮ふ碩ゝ見ゝやうふ　竹友

笋まこちふこゝんぬ一慎　雲暁

たまさかれて行くうとまくよ弦まくら　五柳

ほとしてきく柏手木の音　安田

草も木も眠るばかりの夕しぐれ　園山

注連縄を結る宿は野菊に　千秋

寒鳥やまづ出る笑顔の京の翠　柳雨

冬の夜や瓜引き座阿の佛まで　急銭

月まうで翁語り取り不断に於て　青斧

門の如や古本を読んて過ぎる　抱月

蛇も只龍も瓦に入るうとし　文旋

陶土ふりさぬ神も頃　墨池

家毎にかいた壱把を競ふらん　半翠

帆に海面の煙る汐風　青斧

言の葉のこぼれを夜に拾ふ哉　甫

その下蔭乃菫あんはく　枕革

秋風や川ふとさゝする有明の風　岡ノ丁 抱月

一葉ちる手向ことばのかく　[illegible]磨

涼しくもんを[illegible]にして夕まくれ　スカ十 左江

萩や垣根より[illegible]　村松 芽宜

花となく[illegible]　岡ノ丁 龍耳

[illegible]　下タ平 米翠

[illegible]　仙田 素斧

露打て[illegible]　コセン [illegible]

月さえ[illegible]月に[illegible]やかの空　新カタ 本甫

咲く白き[illegible]　保田 芽芸

[illegible]秋や[illegible]して下[illegible]　[illegible] [illegible]佳

[illegible]　コセン 篠風

[illegible]　シハタ 水哉

秋立と[illegible]　中ノ目 [illegible]舟

[illegible]　岡ノ丁 [illegible]

手向んと狸ぬらすや花もみぢ　シハタ　暁雲

世中は秋の情ぞ田毎なる手向一ッ鐘　中條　文瑳

桜子は近くすぐりし秋の月の名月　シハタ　柳坡

花と紅葉見る紀しぬ秋の風　重子　燕鳥

幹の青散れて桐の一葉かな　紫　杉庵

月とやも見に出てそ更ゆく里　上條　梅淮

ちぎりしまその涼りや昔物　シハタ　斗月

かげろふのまに見えまする夕の百　井ノ栗　丈草

草の秋なきまさとや草の露　セオカ　忍阪

ちるものとみえてまた花と垣の花　小幡　小出

大松にうけ居てのかやくての月　セオカ　象芝

淋しさや鳥の羽音をとをしきみ　友重　泉気

まちて慣れて流や秋の水　伊勢平治　薫て

見おくるやおくりしの秋しるし　杉の宗

まつ虫に松茸の香も移りてや　千手 色我

きゝしより寸つゝみ出て夜の雲か　吾風

露からりしづくして森の上　山口 亀梅

松風は耳にさはらぬや秋の夕　銚子 東窓

月もなき里に手向けぬ魂まつり　維石

忍ばれしまゝつとしきえた窓の声　十日町 竹哉

手向にと縫うてし萩は夜しのぶ　中條 千秋

組ともにさびしき音もありにけり　紫園山

まろや月はかゝりの塩田かな　学古

在にしたまふや狸さへの寝所　李来

夕月や雨なつかしき草のかげ　朧鵑

月は窓たのしさをまつの葉のあと　墨池

長瀬こゝに夜るながきや草の花　反目 楓一

虫千株世界にすむや初嵐　下組 崔巣

釣し水郡の更けゆけとおもひけり　岩沢 竹里

あふむきてねるなり夜の月のかげ　梅鳥

去年や古きむかしの夏にゆめ　富志
松の朝日につかぬほし秋の暮　雲嶂
秋もまだ早しと薄すゝきありて　竹友
月かけのうつろひ安くなりにけり　樵水

名家文略

こちらとも隣にもや花すゝき　向蔦翁
名月の照りまさるの静けし山の影　幹雄
子の魚も篭まで出ておもしろく　手畝

涼月や照てもみねば傍の内　花翁女
やみよ来て秋をおくあり山の上　桜花女
草木にも市も實りし秋の月　清雅
早稲除けて居れば吹くなり秋の風　嵐牛
目にとまるものから吹くよあまの風　笋浦
花せいもちりともせぬおとまなゐ　弘美
山西手月も出て来ぬ秋あはれ　青宜
出とつり馬は家の秋の末の錦　永機

松志てつきを鋸にけ業のまち　芸柱
涼しさや松家にたてし筆かゝる　非園
朝ちかや宿のちからの座くらゐ　九峰
吹きもしる方に柳を合ふ花の　浣玉
色に出て伸とまりぬ菊の影　蓋迹
秋もきかに晴て東都木のふ　月磨
初菊のぬれ傘つむやちる標　暁烏

松風や夕顔棚にうごく　芋村
むしのなくまゝに幾しきぬる　巌北
待宵や先をやこえる水の面　十水
朝なやかきくれし比ふしの庭　湖道
波路こえ出しより月の人　招鴬
雨やまつまもなき姿中の宿　松房
庭掃て居れは月かな　蕉史
松風や川波かゝるさらし畑　前立

初丁のきじや雪うら月おぼろ　カ 嬰乎

宵みせ出す蝶呼て月見かな　ノト 氏湖

花捨てむしり葉ちる小山かな　エッ中 雷村

あの鐘をきゝに橋ら枕かな　サヌキ 芭臣

無きけといひてとまれやきりぎりす　ヱチ中 笠海

秋さからや月みせうふ雲さす月　アハ 芽桂

名月と恨さめてよききり秋の風　抱清

年ふるまゝのあはれさきくの露　花風

かゝしと生きちりぬ枕かな　季作

住まゐる里をちらし秋をふる　士性

志ふ草や侭の名の秋とし上ま　ハリマ 鏡也

葉桜も咲てゆるみぬふ二度　スルカ 宋叟

掃きこ庭さや柳のやらかき落枕　仙台 甫山

市人のこしる我見せて草見の風　十湖

降来て見れば廣き初月夜　木園

麦蒔人の日南も刻しに古る　寿流

まねけとも日も無縁の芭蕉に　乙毛

竹山をまくらに山の稲刈けり　九湍

霧たちし夜のつとめや後の月　雪香

稲の雨や晒くさまゝる　穂う里　九朱

年寄りの咄や麦も秋の鐘　白鴨

きくの香や好み薄し麦も　佛良

山吹や春の夜のまにまに来ぬの声　寿陽

暖けて貸借後や第の話　杜霞

冬待て菊田に秋の花ふりけり　羊山

花散て初秋の蝉にふりけり　華岳

古ふくへ寺家の向は十日月　荷風

木の葉の行く秋の夜　其葛

水おとに穂さえ隠れ月　松翠

昨住て十こね　青池

とく咲て木槿にまとふ露の糸　臨池
粟黍の穂にみるや月の門　松石
松風の音にまぎるゝ虫の篝　良遊
露かゝる尾花にて月見る舟　梅五
庵の筆硯すゝしくて見るなり　明甫
ところし月初むるや秋袖　松仙
つくろはぬ庭の垣根の鶏頭　衣洲
夕けむりて背にけふ月の雲　百舟

つゆしもに老ゆく秋はさむき哉　三宥
下りかゝる坂より月の見えにけり　京
清瀧りして清し水の月　梅堂
草刈て芒に鶯の声の風　輝良文
待宵も人に遅れて松虫の声　嘯月
見て行くや往来に月の影　銀川
あらたまの影にけふや雲の月　綾唐
さえ渡る松の葉にさす月哉　桂性

鎌倉も材(?)へてこそ露の宇　ふ逗

浦高う満来る汐や月の入け　古杉

まかりみよ浦にいさよふ月の跡　可静

月よしとおもふ宿のありしも　二乞

惜しさや見ぬ人ありて月の友　若畔

夜寒さも松籟月の替りむら　辰和

鐘の音も小波くて月清し　里株

夜もすがら水影ありて月の浮舟　秀石

上弦して浮ちさうき名所　白二

萩の若を津しよ見るや蓋月夜　一康

見るうちふらしと守り女　杜の里　枝洲

草木まで胡のいろくし秋の露　悠哉

昼八日を見ぬやもちれて夜の月　松代 翠丈

余興　　何處

それと聞く梅さかるや萩の声
さし忘れたる宵か出る月　不　蕉
星かりに雑子して秋をよるさくて　依芽
探さ　様にさきの葉やま　苗
中てくる数に村家きうる覚え　蕉
たく柚の香にまる出来芽く　芽

さし付る園よりふかに卯花ふ里　苗
まろくなきん軍の其敬　蕉
京風の三女とこる行脚哉　芽
口ぞちらくるの方ふ京への屋　苗
同諸書とまの化まむまきり通し　蕉
まくけふ恋つすあれ地百夜　芽
三日月の松小生こうふ下りかく里　苗
実いかとふ八まつと衣め　寛　蕉

米搗を尼に給ふ摩みして　芽
賞翫して葉らうつ水をき　岗
かへりみは数年も秋の暮の哀　蕉
江戸も淀よりと東へ妹来る　芽
此比は未その夜もあるぬらぬ月　岗
酒も箱の更もりかに合　芽
親仁より数のうれしき孝をさし　蕉
世嗣の浩子にひとつ瘠りわ　岗

梅もまた探るはいつとしも春なれど　芽
驚かせ風さえさましき寝めかし岩　蕉
温泉に投て山熱湯ふつきおりして　岗
みそりとも何待る待て居る　芽
天井も杉の板目がきつそりと　蕉
神主殿のあはれなる哀あらん　岗
盆も色の夜はわが影盆の月　芽
汗の乾くあと始めやか加　蕉

小いましき田楽ふきらつゝさし　甫
婆女の顔空いろも初見えて　芽
旅日記ふ書入ておく玉のまゝ　蕉
宇治ハ位を持て渋しと　甫
慄ちも若やうら生化やゝやうふ　芽
よきてきろへす治のうらくあ　蕉

題芝吟集後
冒雪松凌粟柏千載名枕潤
古高風根至家亂迸松未當
宛慕挺然松柏風昔夢訓示
譚今見風流流漂世愛永意
有七順耶道一憐新月珠

あすか年月十五日京にて松寿庵主
七十三回の忌辰をとりおこなひ給ひ
まつり我ほりてしかからきこととあ
風土まよをおくり給ひし近く御在
ゆるさせ給ひしかねの世の性をもと
申されし御一首と御辞をとゞめのし
のこしたまひぬ九十七とせ

皎々寒氣自一方學大溪川
潺々流晨夕鳴喚往者不逢
東去宗仙凡蹤隔難相眠
明治辛卯晩秋
孫男　枕石讓謹識

志らしとて月はまつくとも雪の糸　嗣子　石蕉

名寄や手向ける中の梅なれと　孫　たみ女

辛未仲秋

是集竊以叟之遺意をまかせ
かゝる拙き集めに侍りしのみ

嘉永壬寅秋

越後中山沼野仙司
増田定助

富田藏書

明治三四